植草学園短期大学研究紀要　第18号　47 ～ 62頁（2017）

全校で作成する「授業スタンダード」を目指して
― 子どもの声と教師の好事例に基づくユニバーサルな授業づくり ―

“Lesson Ideas” Designed by the Whole School: For the Universal Class Making Based on Child’s Reaction and Teacher’s Good Case

鈴木　　香[1]　　佐藤　愼二[2]

全校で取り組むユニバーサルデザインの授業づくりを実現させるために、子どもの授業への思いを調査し、教師の好事例を集約した。それに基づき、40の支援で構成される「ユニバーサルデザイン・アイデア集」を作成した。さらに、全教員の投票により、10の支援からなる「授業スタンダード」（案）を作成し、その有用性・活用性を検証授業を通して検討した。その結果、全教員で共通理解し、活用を図る「授業スタンダード」を完成させた。

キーワード：全校、授業スタンダード、ユニバーサルデザイン、子どもの声、教師の好事例

Ⅰ　問題と目的

『通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果』[2)] では、「知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難を示すと担任教諭が回答した児童生徒の割合」は6.5％であり、「学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒を取り出して支援するだけでなく、それらの児童生徒も含めた学級全体に対する指導をどのように行うのかを考えていく」「困難を示すとされた児童生徒が理解しやすいよう配慮した授業改善を行う」必要性を指摘した。

近年、発達障害等の配慮を要する子どもには「ないと困る」支援で、どの子どもにも「あると便利で役に立つ」支援を増やすというユニバーサルデザイン（以下、UD）への関心が高まっている[1)3)5)]。

しかし、これまでのUDの実践研究に対し、教師個人の工夫や努力に任され「全学級でUDの授業が行われてこそUD化の効果があがる」[8)] 等の全校で一貫した取り組みの弱さや、「環境や方法を整えることばかりに傾倒するのではなく、目の前の子どもたちを通して教室や授業をどうデザインするか考える姿勢が求められている」[6)] 等のUDの形骸化を危惧する声もある。

そこで、本研究では、改めて授業に対する子どもの意識や行動を把握し、合わせて、「気になる」子どもに対する教師の支援等を全校で集約し、UDの実践上の要点を整理する。それら支援の有用性を検証授業等を通して検討する。その結果、UDの授業づくりの観点を教師全員が共有し、活用できる「授業スタンダード」を作成することを目的とする。

Ⅱ　研究１―授業（算数科）に対する子どもの意識調査

１．目的

授業に対する子どもの思いを把握した上で、支援を必要とする子どもに「ないと困る」支援で全ての子どもに「あると便利で役に立つ」支援を検討する。

1　鴨川市立小湊小学校
2　植草学園短期大学

２．方法

（１）調査対象：Ａ市内小学校　各通常学級（６学級）児童（61名）

※交流及び共同学習で算数の授業に参加している児童（２名）を含む

（２）調査内容・方法：授業が「楽しかった・分かった・できた」と感じるときを図１の全22項目から選択式で回答する調査用紙（含、自由記述）を作成し、６月第５週～７月第２週までに実施。

３．結果と考察

結果を図１に示した。子どもが「楽しかった・分かった・できた」と実感する要因として、「教師のわかりやすい話し方・指示の仕方」「友達との相談時間」「学習内容の提示」等の重要性が示唆された。

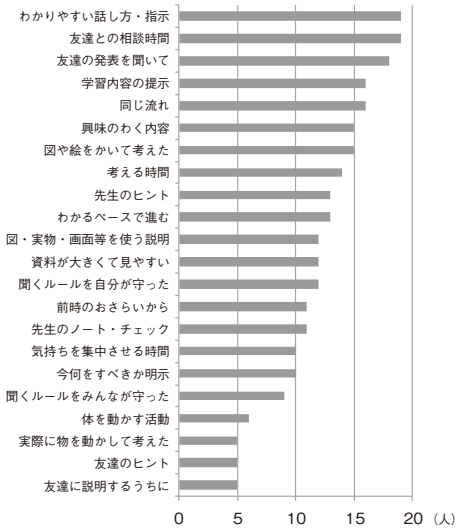


図１　「楽しかった・わかった・できた」理由

Ⅲ　研究２―授業（算数科）の授業分析

１．目的

研究１の結果をもとに検討したUDによる支援を取り入れて授業展開し、授業中の子どもの行動の現れを把握する。

２．方法

（１）対象：研究１と同様

（２）時期：６月第５週～７月第２週までの間の各学年１授業

（３）分析方法

○１学年から６学年まで全ての授業（６学級×45分＝270分）をビデオ撮影し、分析対象とした。

○「気になる」子どもと「上位の」子ども各１名を抽出。「意欲低下状態（手いたずら・指示と違う行動等）の出現場面」を15秒ごとのインターバル記録法で観察・分析した。

３．結果と考察

図２のように、「気になる」子どもについては、「比較検討」場面において、顕著な意欲低下状態が見られた。さらに、「まとめ」の場面でも同様の傾向が見られた。これらは、いずれも、本時の学習のポイントとなる場面であり、ここでの注意力低下は学習理解に大きな影響を与えることが示唆される。

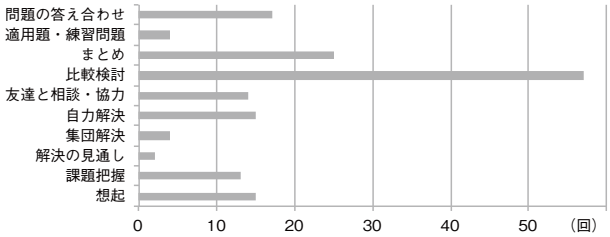


図２　意欲低下状態の出現場面とその頻度（学習場面）

この意欲低下状態を、教師の教授行動の観点で分析すると、図３のようになった。「机間指導」、「板書」を除き、子ども側の「聞く」活動と言える。

なお、上記の傾向は全校児童を対象とした分析でも示されており、これまでの研究[10] でも、同様の結果が指摘されている。もちろん、“聞いている＝理解している”“聞いていない＝理解していない”ということではない。評価テスト等の客観的な内容理解に関する評価は求められよう。しかし、「聞く」活動が成立していかるか否かが子どもの授業参加度を推し量る指標の一つであることに異論を差し挟む余地はない。

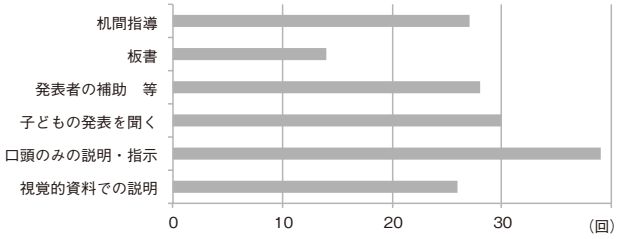


図３　意欲低下状態の出現場面とその頻度（教授行動）

一方で、研究１に示されたように、子どもが「楽しかった・分かった・できた」と実感する場面も

「教師の説明」や「友達との相談」があげられている。子どもが「聞く活動」、すなわち、教師の指示・説明、友達の発表・相談場面（「比較検討」場面）に関する有効な手立てを講ずることがUDの一つの要点であることが示唆された。

Ⅳ　研究３―教師の好事例に基づく「ユニバーサルデザイン・アイデア集」の作成

１．目的

「気になる」子どもを含めて「分かる・できる」授業をめざして講じてきた具体的な手立てを集約し、「ユニバーサルデザイン・アイデア集」を作成する。

２．方法

（１）調査対象　Ａ市内小学校　教師全員（12名）

（２）調査内容・方法

①「気になる」子どもに対し授業において効果的であったと思われる支援－どのような場面で、どのような子どもに、どのような支援をしたら、どう変わったか

②どの子どもにも「分かる・できる」授業をめざして、ふだんの授業で心がけていること

上記を自由記述できる調査用紙を作成し、記入を依頼。必要に応じて、詳細についてインタビューを実施した。６月第１週に配布、第３週に回収。回収率は100％であった。

（３）分析方法

全教員から集約されたアイデアを教師の実際の活用性を踏まえて表１の３つの観点で整理した。合わせて、先行研究で指摘されているユニバーサルデザインの観点、さらに、筆者らの実践上の知見を加味して検討した。

表１　アイデアを整理するための項目

①その支援の活用場面・活用の仕方
②子どもの困難さにどのように有効か
③この支援により教師側に生まれるメリット

３．結果と考察

結果として、40のアイデアがまとめられ、その抜粋が表２である。しかし、40全てを「スタンダード」として教師が日常的に意識し、実践することはできない。そのため、今後はさらに絞り込みの検討が求められる。

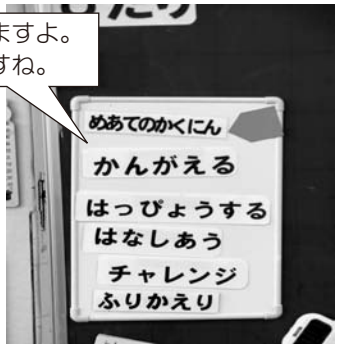
表２　40のアイデア（抜粋）

①学習の流れの提示

導入時～

本時の流れを順序立てて黒板上に掲示（必要があれば読み上げる）したり、進行に合わせて矢印を移動したりする。

※特別日課の時、《１日の流れや時程》を板書や校外学習のしおりに示すことも同様の支援となる。



《先進校例》

「めあて（スタート）

・自分タイム・みんなタイム・まとめ（ゴール）」で統一

【こんな子はきっと助かっています】

◇見通しがもてないことで不安になる

◇注意集中が難しい

◇活動に出遅れる

⇩

今は何をするのか、次に何をやるのか、活動はいくつあるのか、本時のゴールは何か、等がひと目でわかる。

⇩

○安心して参加できる

○集中して取り組むことができる

○忘れても見て確認できる

○遅れて来てもスムーズに合流できる

【おすすめポイント】

・簡単な授業計画が立つ

・流れについての詳細な説明が減る

②タイマーによる活動時間の設定

自力解決時

必要な活動時間を確認した上で、制限時間内に取り組ませる。

《先進校例》

時間を量として見ることができる「タイムタイマー」の使用

【こんな子はきっと助かっています】

◇見通しがもてないことで不安になる

◇注意集中が難しい

◇短時間ならがんばれる

↓

時間内に終われるよう、集中して活動に向かうことができる。残り時間が見てわかる。

↓

○集中して取り組むことができる

○時間内はできる範囲で努力しようとする

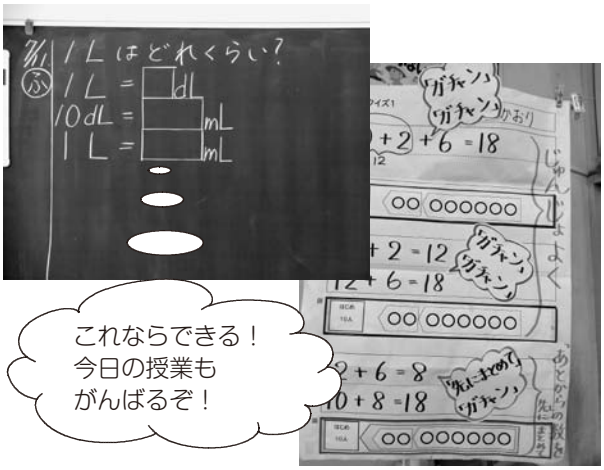
【おすすめポイント】

・音が鳴るので、終了の合図をする必要がなくなる

③前時の復習や既習事項の想起

自力解決

全員が答えられるような簡単な問題を出す、前時の学習内容をノートや掲示物や記憶をもとに振り返らせる等「これならできそう！」という見通しや自信・意欲を持たせることから始める。



【こんな子はきっと助かっています】

◇苦手意識が強く、やる気が起きない

◇「習ったことならできる」自信がある

◇発表の出番があまりない

◇前時の内容や既習事項を覚えていない

↓

本時の課題に向かう全員のスタートラインが揃い、課題に取り組む意欲が高まる。

↓

○始めから諦めず、取り組もうとする

○自信をもって取り組むことができる

○指名・発言により自己有用感がもてる

○押さえ直しにより、本時に向かう姿勢ができる

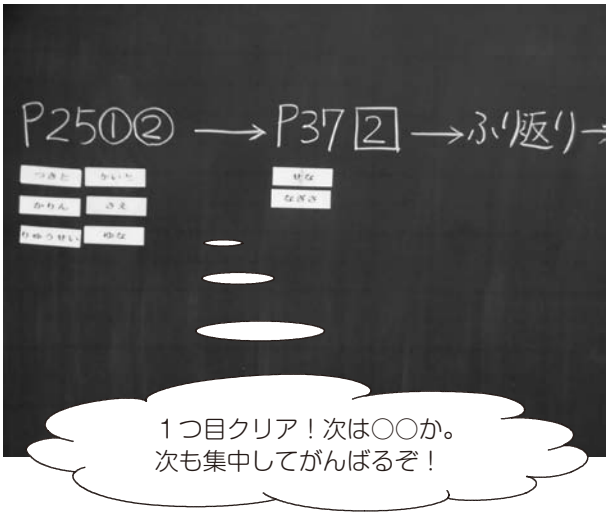
【おすすめポイント】

・ある程度のレディネスチェックができ、つまずきへの対応につながる

④ネームプレートによる進度の見える化

自力解決

個のペースで進む練習問題や作業学習の際、ページ番号や作業工程の通過ポイント（進度）に合わせて、黒板上のネームプレートを随時移動させる。



【こんな子はきっと助かっています】

◇取りかかりに時間がかかる
◇学習（一人で進めること）に自信がある
◇次に何をやるかがわからない
◇じっとしていることが苦手

↓

自分や友達の進度がわかり、競争心も生まれる。ネームプレートを動かすことでゴールを意識し、意欲的に取り組む。

↓

○もくもくと問題や作業を進め、ゴールをめざそうとする
○集団の勢いに押され、集中度が増す
○出歩ける時間があることで、落ち着く

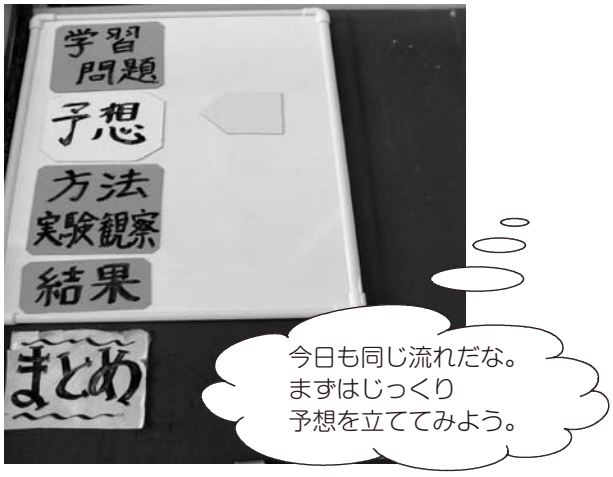
【おすすめポイント】

・進度の遅れている子がわかり、個別支援しやすい

⑤授業の流れのパターン化

導入～（常時）

算数なら『問題提示→学習問題づくり→見通し→自力解決→話し合い→練習問題→まとめ』等、理科なら『問題提示→予想→実験→結果→考察』等と決めておく。



【こんな子はきっと助かっています】

◇見通しがもてないことで不安になる
◇先の活動が何か、気になって集中できない

↓

次の活動の予想がつくので、安心して学習に取り組むことができる。

↓

○やることがわかるので、主体的に取り組める

【おすすめポイント】

・活動の切り替えの指示が少なくて済む

⑥課題のスモールステップ化

導入～（常時）

本時の達成目標に向けて、形成的評価を細かく取り入れ、丁寧に進める。

【こんな子はきっと助かっています】

◇理解が遅れる
◇長時間の注意集中が難しい
◇達成感がもてない

↓

一斉指導の流れで、わからず、ついていけなくなることが少なくなるので、諦めずにがんばることができる。「できた・わかった」感が増える。

↓

○随時理解度を確認されて進むので、わからないことが減り安心して取り組める
○集中を持続させながら課題に向かえる

【おすすめポイント】

・段階ごとのつまずきに気づけ、その場でフォローできる
・褒める機会が増える

⑦適度な刺激・緊張感

導入～（常時）

集中が途切れ、学習から意識が離れている子がいた時、教科書を読むよう指示、指し棒で黒板を軽くたたいて音を出す、「今～したのがわかる人？」と問い直す等の刺激を入れる。また、例えば音読の際に間違えたら次の人にチェンジ、一文ごとの丸読み、タケノコ読み等色々な方法を取り入れて、必ず全員に順番が回るように仕組む。

【こんな子はきっと助かっています】

◇指されないと安心して気が抜けている
◇学習に退屈している
◇注意集中が難しい
◇手いたずらに夢中になっている

↓

はっとして学習に意識を戻すことができる。順番を待つ、心の準備をする中で、より集中力を高めて学習活動に参加することができる。

↓

○授業に参加している実感がもてる
○覚醒水準が上がり、再び気持ちを集中させようとする

【おすすめポイント】

・注意せずに、自身に気づかせ、正そうと促すことができる
・ゲーム感覚で楽しい雰囲気になり、次の活動への集中力が高まる

⑧座学からの解放タイム

導入～（常時）

話をずっと聞いているだけで、集中力が途切れそうな時に、体を動かす（立つ・移動する・指で指す・指遊びをする等）活動を挟む。

《先進校例》
フラッシュカードの活用、挿絵提示読み、立って読む・立って話す　等

【こんな子はきっと助かっています】

◇集中が続かない
◇学習から意識が遠のき、ぼーっとする
◇じっとしているのが苦手
◇学習への苦手意識が強く、退屈する

⇩

楽しさにより覚醒水準が高まったところで、再び学習に向けたスイッチが入る。

⇩

○気分転換になる
○意欲・参加度が上がる

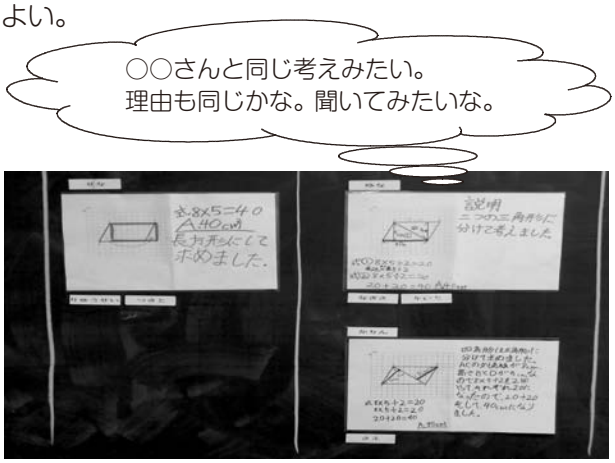
【おすすめポイント】

・集中できていないと注意せずに済む
・指導のテンポがあがる
・反応していない子等の把握がしやすい

⑩ネームプレートによる立場の明確化

課題把握～

様々な選択場面・自己主張場面において、ネームプレートを貼ることで自分の立場（考え）を自己決定・意思表示させる。
※比較検討ののちに、立場（貼る場所）を変えてもよい。



【こんな子はきっと助かっています】

◇自分で考えられない
◇自己主張が苦手
◇学習参加意欲が低い
◇じっと座っているのが苦手

⇩

いずれかに所属する必要性から、思考が促進され、自分なりの考えをもつようになる。自己主張だけでなく、友達がどちらを選択したかもわかり、議論の幅が広がり、学習が深まる。

⇩

○授業に参加している実感がもてる
○瞬時の決断力・判断力が鍛えられる
○選んだ根拠も考えるようになる

【おすすめポイント】

・その時の思考の傾向が把握できる

⑫相談タイム・柔軟な学習形態

導入～（常時）

課題が難しくて、思考が進まず、発言者が減ってきた時やじっくり考えさせたい時等には、一斉指導を中断し、近くの友達（ペア・グループ）と互いの考えを持ち寄って相談できる場に切り替える。

なるほど。○さんはそうやって考えたんだね。

《先進校》
ペアやグループでの相談タイム！
助け合う（つけたす）発表

【こんな子はきっと助かっています】

◇自分の考えに自信がない
◇わからないから友達の考えを聞きたい
◇少人数なら話せる
◇じっと座っているのが苦手

⇩

友達の説明を聞いて、わからなかったことがわかるようになる。全体に向けて発表する前のリハーサルにもなる。動くことで、覚醒水準が上がる。

⇩

○思考の整理ができる
○次の比較検討場面に参加しやすくなる

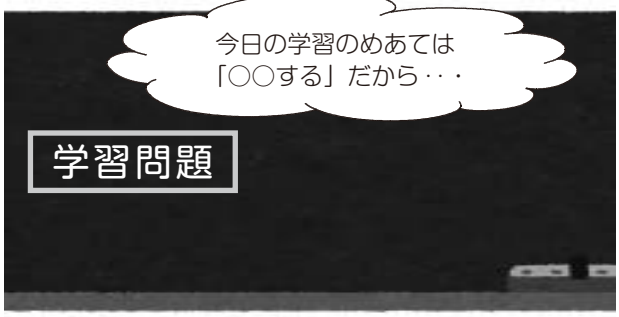
【おすすめポイント】

・机移動がスムーズにできるようになる
・発表者が増え、比較検討を深めることができる

⑬目的の明確化

課題把握～

何のための活動・学習かという目的や今日のめあてを子どもに確認、具体的に明示する。



《先進校例》
教師がやらせたいことでなく、子どもがやりたいことを学習のねらい（焦点化）に！

【こんな子はきっと助かっています】

◇何をすべきかわからず、始められない
◇自分で考えて決められず、指示を待つ
◇いつも友達のまねをする

⇩

学習のゴール、そこへ向かう目的がわかれば、主体的に学習に取り組むことができる。

⇩

○めあてに対する振り返り（まとめ）ができるようになり、「できた」かどうか判断しやすい

【おすすめポイント】

・やる内容からずれた時に、立ち戻り、確認させることができる。

⑮相手意識をもたせる（話し方）

比較検討

聞き手が理解できるような話し方（適度な声量・図示しながら・具体物を見せながら・相手の反応を見ながら等）を意識させる。※声のものさし・話形の掲示

【こんな子はきっと助かっています】

◇周囲に構わず自己主張ばかりしてしまう
◇話し手を見ず、一方的に話す
◇聞いているのに話の内容が入ってこない
◇自信がなく、小さな声で発表する

⇩

話し手は相手（ペア・グループ・全体）の反応に応じて伝わるような話し方に努めるようになる。聞き手も必然的に話し手に気持ちを向けるようになり、伝えたいことの理解が進む。

⇩

○互いの意見を大事にし話し合いが深まる
○聞き手の相手意識も育つ

【おすすめポイント】

・伝え合う集団が育つ
・教師の補足説明が減る

⑯ホワイトボードでの表現・比較

自力解決～

自分の考えをホワイトボードに書き、それを持ち寄って黒板に掲示（し、集合）させる。

【こんな子はきっと助かっています】

◇鉛筆で書くことに負担感がある
◇友達の発表を聞けない　◇注意集中が難しい

⇩

ホワイトボードはすぐに消せるので、自分の考えを安心してかくことができる。マグネット付だと同じ考え・違う考えを子ども同士で分類整理することもできる。

⇩

○ペンだと抵抗なくかける
○自分のが掲示されるので参加度が増す
○黒板前に集合させて指示したり、比較検討させたりすると、集中力が高まるとともに、安心してつぶやいたり相談したりできる。

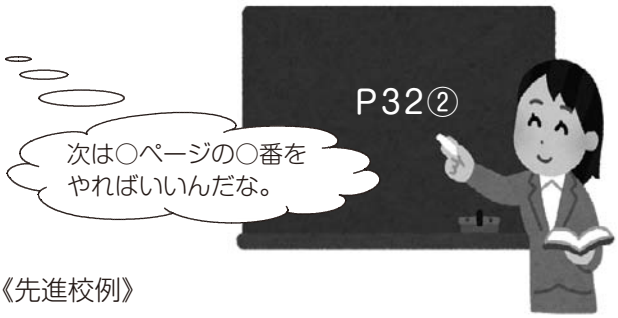
【おすすめポイント】

・掲示用の別紙を用意しなくて済む
（ノートに残らない点は今後検討）

⑱具体的な表現を用いた指示

導入～（常時）

言葉だけでなく、時には絵や文字・身振りをつけながら話す。あいまいな言葉は避け、より具体的な表現（言葉の精選）を心がける。「今から３つ話します」「1つめは」等、順序や数を使って話す。取り組むページ番号等を板書で残す。



《先進校例》
NGワード･･･ちゃんと・しっかり・早く・あっち・こっち・あと少し　等

【こんな子はきっと助かっています】

◇言葉（聞く）だけでは理解が難しい
◇注意集中が難しい
◇聞く態勢が整っていない

↓

視覚的補助や具体性のある話し方により、混乱する場面が少なくなる。解釈の違いによるトラブルも減る。

↓

○やることがわかり主体的に取り組める

【おすすめポイント】

・子どもは具体物に反応・注目しやすい
・教師の話し方が、子どもの発表モデルになる

⑲一時一作業による注意集中

導入～（常時）

「聞く時は聞く」「書く時は書く」等、１つの作業・活動に子どもが集中して取り組めるよう、活動中の指示を避け、今はこれをする時！と明確に分ける。

【こんな子はきっと助かっています】

◇同時処理が苦手
◇注意集中が難しく聞き漏らしてしまう
◇活動中の指示が妨げとなり、混乱してしまう

↓

聞き漏らしが減る。何をすべきかわかる。

↓

○やるべきことが１つなので、 集中して取り組める

【おすすめポイント】

・子どもの視線を確認しながら一斉に伝える・指導することができる

⑳一文一動作による簡潔な指示

導入～（常時）

指示を出す時は、（作業を止めさせ注目を集めてから）できるだけ短く、１つの指示で１つの課題になるようにする。

【こんな子はきっと助かっています】

◇記憶することが苦手でうまく聞き取れない
◇注意集中が難しく聞き漏らしてしまう
◇語彙が少なく、言語理解が難しい

⇩

聞き漏らしが減り、理解しやすい。聞いたはずの話について不必要な質問をしなくて済む。
○やることがわかり主体的に取り組める

⇩

【おすすめポイント】

・聞き漏らす子に過度な声かけをしなくてもよい
・指示通りにできているか確かめながら指導できる

㉑わかりやすい板書

導入～（常時）

見やすい字の大きさ。色チョーク（赤が見づらい時は使わない）により、ポイントとなる文字を囲んだり色文字にして強調。考えさせたい部分は空欄（□枠）にする。

発達段階によっては、子どものノートのマス目の数に合わせて改行。ノートへ写す際は、書き始めを指示する。

《先進校例》
黒板脇はできるだけシンプルな前面に！
（必要な時だけ見えるよう、カーテンで目隠し）
板書とノートの対応
（見開き１～２ページ基本）

【こんな子はきっと助かっています】

◇注目が難しい
◇何をすべきかわからない
◇見て書くことに時間がかかる
◇書くのに精一杯で指示や学習内容が理解できない
◇文字を書くことに負担感がある

⇩

ノートへの写し方や今すべきこと、注目すべきところがわかる。
※場合によっては個別の配慮（量の調整・ワークシートの併用・手元の見本等）により負担を減らす。

⇩

○1時間の学習の流れがわかる

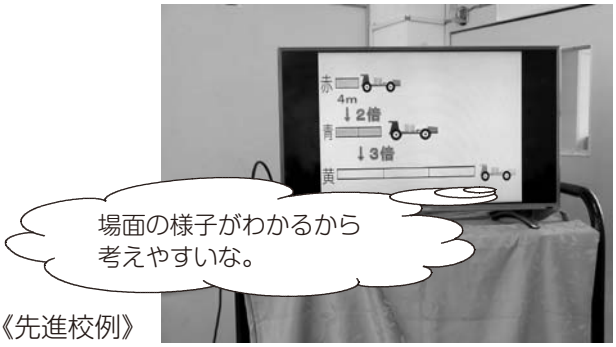
【おすすめポイント】

・学習問題やまとめの書き方やマーク等を同じにしておくと、指示がなくても主体的に書き始める

㉒視覚的資料の活用

課題把握～

言葉だけでなく、場面絵や具体物、絵カード等の視覚的資料を活用する。



《先進校例》

一部を見せる、一瞬だけ見せる、一部間違っている物を見せる等、取り入れ方次第で「何かな・もっと見たい」とさらなる意欲化を図る工夫！

【こんな子はきっと助かっています】

◇聞くことより、見て理解・イメージする方が得意
◇何をどうしたらよいかわからない
◇注意深く聞こうとしていない

↓

手がかりとなるものを具体的に見たり操作したりできるので、聞いているだけより理解が進む。

↓

○話の意味がわかる
○何について考えればよいかがわかる。
○見通しをもつことができる

【おすすめポイント】

・瞬時に注目を集めることができる。

㉕指示に対する理解度の確認

課題把握～

ていねいな説明や指示をしても、理解できていなかったり聞いていなかったりして、とりかかりに遅れる子がいる場合、説明の直後に、伝えた内容を確認する。（もう一度言わせる・見るべき場所を指で押さえさせる　等）

【こんな子はきっと助かっています】

◇先生や友だちの話の意味がわかりにくい
◇話を聞いていない
◇自分の言葉で説明するのが苦手

↓

聞き逃した子や一度で理解できなかった子にとっては、再度聞くチャンスとなる。時々声がかかると一度で話を聞き取ろうとするようになる。

↓

○毎回取り入れる必要はないが、聞く姿勢づくりに役立つ
○活動のスタートを揃えることができる

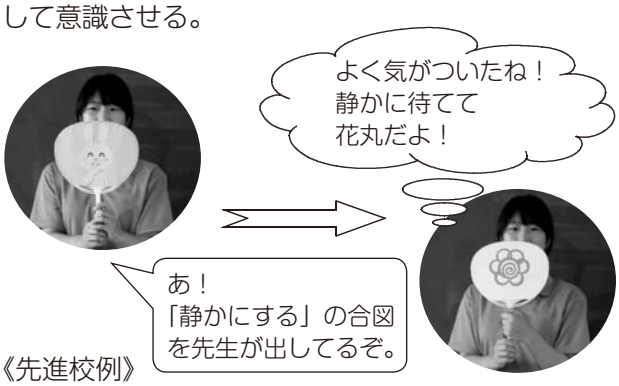
【おすすめポイント】

・子どもがわかっているようにしていても通じていなかったことに気づけ、指導を修正できる。

㉛聞く環境づくり

常時

話し始めに注意を向けさせ、注目が集まってから話す。子どもの反応に応じて声のトーンや話す速さを調節する。時には声を出さずに、一目でわかる指示カードや合図・アイコンタクトを使う。必要に応じて「聞き方名人」等統一したルールを確認・掲示して意識させる。



《先進校例》
聞き方・話し方名人の掲示物
うちわをリサイクル（両面合図）

【こんな子はきっと助かっています】

◇途中で話しかけてしまう・遮ってしまう
◇友達の反応を待たずに答えてしまう
◇最後まで聞かずに間違ったことをする
◇全く聞いておらず、出遅れる
◇暗黙のルールが理解しにくい

⇩

相手の話を大切に聞く気持ちが育つ。

⇩

○聞く姿勢が整うと話し手も話しやすくなる
（聞く態勢ができてから話すようになる）
○注意深く聞く・考えながら聞くことができるようになる

【おすすめポイント】

・学級として聞く環境が整えば、大きな声を出す必要がなくなる
・できている子を褒めることができる

Ⅴ　研究４―「授業スタンダード」（案）の選定

１．目的

研究３で作成された「ユニバーサルデザイン・アイデア集」を基に、全校で一貫したユニバーサルデザインの授業づくりに取り組むために、共有・活用できる「授業スタンダード」（案）を作成する。

２．方法

（１）対象　Ａ市内小学校　教師全員（12名）
（２）時期・内容

40の「ユニバーサルデザイン・アイデア集」を有用で活用可能な10のスタンダードに絞り込むこととした。全教員の納得と合意を重視して、一人10項目を、７月第４週に投票した。

開票結果は表３の通りである。これをもとに選定した10の観点を表４に示した。教師がUDの授業づくりの際に最低限必要と考え、選んだ支援のほとんどは、子ども自身が効果的であると感じている支援（図１）と関連していることが明らかにされた。授業は教師の支援だけでなく、子どもの実感や手応えとの相互作用の中で成立する動的な時空間になっていることを示す興味深いデータと言えよう。

表３　「授業スタンダードにしたい支援10」の開票結果（一部抜粋）

A小学校のどの子にも必要な授業作りの手立て
主体的に授業に参加できる手立て
初任者に必要な指導技術
小規小学校に赴任した方と「最低限これは」と確認し，共通理解したい手立て

授業スタンダード　開票結果

得票数	《投票者数（A小職員）１２》	仮当選
8	①学習の流れの提示	◎
5	②タイマーによる活動時間の設定	◎
8	③前時の復習や既習事項の想起	◎
3	④ネームプレートによる進度の見える化	次々点
4	⑤授業の流れのパターン化	次点
3	⑥課題のスモールステップ化	次々点
6	⑦適度な刺激・緊張感	◎
5	⑧座学からの解放タイム	◎
	⑨合い言葉にして唱える	
3	⑩ネームプレートによる立場の明確化	次々点
2	⑪友達との助け合い	
6	⑫相談タイム・柔軟な学習形態	◎
6	⑬目的の明確化	◎
1	⑭次のステップの予告	
9	⑮相手意識をもたせる（話し方）	◎
4	⑯ホワイトボードでの表現・比較	次点
2	⑰ICT機器による拡大掲示	
5	⑱具体的な表現を用いた指示	◎
3	⑲一時一作業による注意集中	次々点
7	⑳一文一動作による簡潔な指示	◎
5	㉑わかりやすい板書	◎
5	㉒視覚的資料の活用	◎

表４　「授業スタンダード（試案）」の 10 観点

①わかりやすい指示・発問
②学習の流れの提示
③活動時間の設定
④目的の明確化
⑤視覚的資料の活用
⑥わかりやすい板書
⑦前時の復習・既習事項の想起
⑧適度な動き・刺激
⑨相手意識をもたせる
⑩相談タイム・柔軟な学習形態

Ⅵ　研究５―「授業スタンダード」（案）の有用性の検証

研究４で整理された「授業スタンダード」（案）に基づき、実際の授業展開を行い、子どもの意識調査、授業者・参観教師の振り返り、ビデオ録画による行動分析、単元評価テストの４つの観点から有用性の検証を行った。その結果、「授業スタンダード」（案）の有用性が確認された。詳細は、『平成28年度　千葉県長期研修生　研究報告「授業スタンダード」の作成とその実践的検討』（鴨川市立小湊小学校　鈴木香）に掲載。

Ⅶ　総合考察

１．「授業スタンダード」の提案について

研究５の成果を踏まえて、図４のような「授業スタンダード」を完成させ、全教員で確認した。

これまでの学校研究としてのユニバーサルデザインの取り組みは、研究部等がある観点を提示し、それに即した形で授業をデザインし、授業研究等で評価するといういわばトップダウンの方法が主流であった。各自治体の教育センター等の方法も同様であった[4)9)]。しかし、今回の取組は子どもの意識調査をはじめとして、全教員が日々取り入れているユニバーサルな手立てを集約する形で研究を積み上げる全員参加・ボトムアップ型の方法であった。今後の学校研究を考える上で示唆的であった。

その意味で、正に、全教員で創り上げ、全教員で活用する「授業スタンダード」と言えよう。

２．子どもの声を大切にする意義

東京都教育委員会による『平成27年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果について』[7)]では、「各教科の内容が分かる要因」について子どもに質問している。どの教科でも「先生の教え方が丁寧だから」という回答が上位を占めている。中学校では、理科で“実験”が最上位であることを除けば、５教科全てで「先生の教え方」が最上位となっている。子どもは教師の授業への熱意や工夫を肌で感じとっていることが明らかにされた。本研究では子どもの意識調査からスタートした。研究４で指摘したように、教師が効果的と考え選んだアイデアは子ども自身が分かりやすいと感じている。先の調査研究も踏まえるならば、仮に、客観的な結果（評価テスト等）に有意な高まりがない場合でも、教師の工夫によって、子どもが主観的に「より分かりやすい」と感じているならば、その工夫の妥当性を評価すべきであろう。

子どもの声や主観的な思いを大切に授業を計画し、評価・改善する姿勢はユニバーサルデザインに欠かせない要点となろう。

３．今後に向けて

「授業スタンダード」は人事異動後の年度当初に、全校で・各学年で確認したい。そして、何より大切なことは授業研究会に際しても、必ず、「スタンダード」を念頭にしながらの事後検討会を実施する必要があろう。日常的な活用こそが「スタンダード」そのものを見直しその質を高めることになり、結果として、「気になる」子どもを含むユニバーサルな授業の実現に結びつくと考えられる。

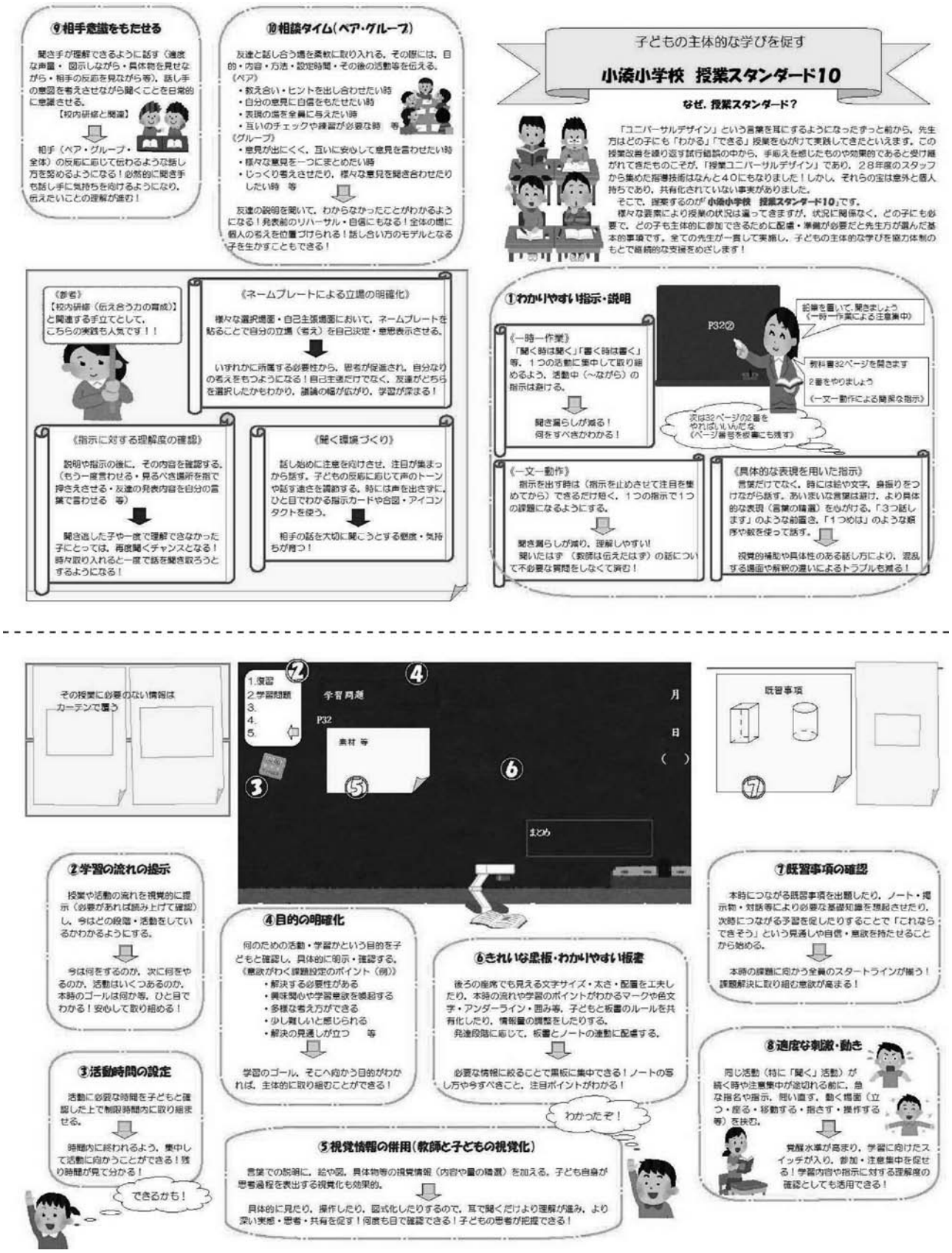


図４　「授業スタンダード」のリーフレット（上段：表　下段：裏）

参考文献

1）小貫悟・桂聖（2014）：授業のユニバーサルデザイン入門．東洋館出版社.
2）文部科学省（2012）：通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果.
3）日本授業ＵＤ学会（2016）：授業ＵＤ研究第１号.
4）大分県教育センター（2016）：ユニバーサルデザインの良さを取り入れた学級・授業づくりハンドブック.
5）佐藤愼二他（2015）：今日からできる！　通常学級ユニバーサルデザイン　―授業づくりのポイントと実践的展開―（植草学園ブックス　特別支援シリーズ２）．ジアース教育新社.
6）田中博司（2015）：スペシャリスト直伝！通常の学級特別支援教育の極意．明治図書.
7）東京都教育委員会（2015）：平成27年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果について.
8）柘植雅義（2011）：特別支援教育研究（No. 652）．東洋館出版社.
9）山形県教育センター（2012）：ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりハンドブック.
10）柳橋知佳子・佐藤愼二（2014）：通常学級における授業ユニバーサルデザインの有用性に関する実証的検討．植草学園短期大学紀要第15号.